

障害のある労働者の職業サイクルに関する調査研究 結果報告

—仕事へ求める事柄の因子構造とその特徴—



独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構

障害者職業総合センター研究部門 社会的支援部門

○大石 甲（障害者職業総合センター 研究員）

春名 由一郎・田川 史朗（障害者職業総合センター）

調査研究の概要

調査の目的

- 障害のある労働者の就職、就労の継続、職業生活の維持・向上等の職業サイクルの全体像を長期縦断調査により明らかにすることを目的として、企業における雇用管理の改善や障害者の円滑な就労の実現に向けての今後の施策展開の基礎資料を得る

【職業サイクル】とは「ライフサイクル」からの造語であり、本研究では障害者に特有のサイクルやパターンの特定を目的とせず、「キャリア」と同様の意味として、より柔軟な視点をもって考えている

本発表の目的

- 職業リハビリテーションにおいて障害者本人からみた仕事の質は重要である
- これには障害者本人が仕事に求める事柄とその実現状況の把握が必要となる
- 当研究で取得している内容のうち、本人が仕事に求める事柄には「仕事をするうえで重要だと思うこと」6項目と「仕事をする理由」7項目がある
- これら13項目の因子構造を分析することで、本人が仕事に求める事柄の構造を明らかにする

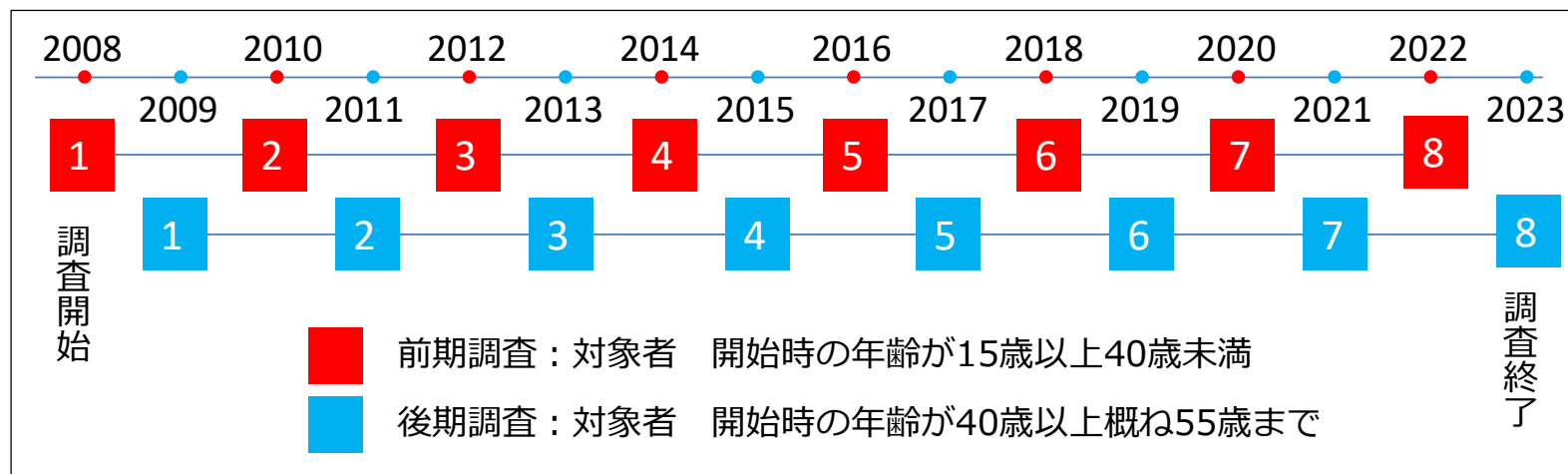
本研究の長期縦断調査（パネル調査）

■ 対象とする障害の種類

- 視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、内部障害、知的障害、精神障害

■ 調査期間

- 2008年から2023年まで16年間継続的に調査を実施



■ 調査研究委員会

- 調査の実施及び結果の分析と解釈に際し、専門的知見に基づく助言を得るため、学識経験者、各障害の当事者団体や家族団体、事業主団体関係者による調査研究委員会を設置

調査対象者

■ 対象者

- 企業や自営業で週20時間以上働いている障害のある労働者
- 離職後も調査を継続して、キャリア形成の状況を確認

■ 募集方法

- 各障害の当事者団体や家族団体、障害者を多数雇用する事業所、就労支援施設等を通じて対象者を募集
- 調査の趣旨を説明し、同意が得られた場合に調査対象者として登録

■ 対象者の補充

- 調査対象者の減少と回収率の低下により、調査対象者の補充を行った

■ 対象者数

- 当初対象者数 1,026人 + 補充数 242人 = 1,268人
- 時間経過とともに追跡不能となり対象者数は減少していく

調査の実施方法

■ 調査方法

- 調査年の7月1日を調査日に指定
- 8月末日を回収締切りとした郵送調査

■ 調査票の形式

- 通常版、ルビ版、点字版、テキストファイル版、Wordファイル版
- 障害の特性に応じて対象者が選択

■ データの扱い

- 回収データは対象者の個人情報と関連付けたID番号で管理
- 個人情報ファイルにはパスワードを付け、アクセス制限した閉鎖ネットワークに保管
- 個人情報ファイルのバックアップCDは施錠できる場所で管理

■ 継続協力を得るための取り組み

- ニュースレターの発送（年1回）
- 回答者への謝品の贈呈（1,000円相当のクオカード又は図書カード）

調査内容

■ 職業生活について幅広く確認

対象者の基本属性



就労状況

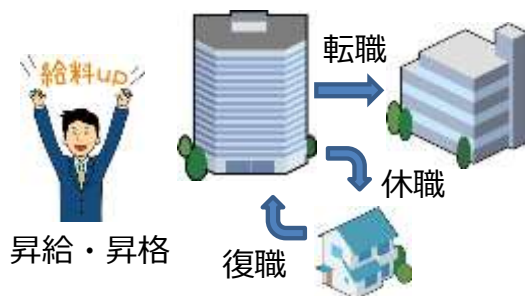


就労形態
職務内容
労働条件
etc.

■ その他

- ・ 私生活上の出来事
結婚、出産、転居等
- ・ 偶数期のみ
の質問
地域生活や体調や健康に関する質問等
- ・ 奇数期のみ
の質問
経済的なことに関する質問等

仕事上の出来事



仕事に関する意識



仕事の満足度

仕事の内容
給料や待遇
職場の人間関係
職場の環境

職場への要望
etc.

分析の方法

■ 分析項目

- 「仕事をするうえで重要だと思うこと」 6項目 (第1期から調査)
「賃金や給料」「自分の能力・経験を発揮できること」「仕事の内容」「職場の環境整備」「勤務時間や休日」「仕事仲間との人間関係」
※重要 = 1 から重要でない = 5 までの5件法
- 「仕事をする理由」 7項目 (第4期後期から調査)
「収入を得るため」「社会とのつながりを持つため」「社会の中で役割を果たすため」「自分自身が成長するため」「生きがいや楽しみのため」「生活のリズムを維持するため」「心身の健康のため」
※あてはまる = 1 からあてはまらない = 5 までの5件法
- 両データがある第5期 (n=660) と第6期 (n=597) の結果を分析

■ 統計分析方法

- 因子分析を実施
主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析
- 手順1 データ件数の多い第5期結果を分析
- 手順2 手順1で抽出された因子数を指定して、第6期結果を分析

調査結果（第5期調査）

障害種類	調査対象者	回収数	回収率
視覚障害	113人	69人	61%
聴覚障害	228人	120人	53%
肢体不自由	234人	144人	62%
内部障害	119人	80人	67%
知的障害	282人	177人	63%
精神障害	115人	70人	61%
全障害	1,091人	660人	60%

調査結果（第6期調査）

障害種類	調査対象者	回収数	回収率
視覚障害	105人	57人	54%
聴覚障害	217人	108人	50%
肢体不自由	231人	126人	54%
内部障害	110人	68人	62%
知的障害	270人	167人	62%
精神障害	110人	71人	65%
全障害	1,043人	597人	57%

分析の結果 1

■ 第5期の結果

■ 分析データは妥当

KMO測度=0.823

バートレット球面性検定

$p < 0.01$

■ 分析データ数

$n = 519$

(すべて回答のあった就労者)

■ 4因子構造を採用

固有値 1 以上の因子

■ 分析結果

右図のとおり。

■ 緑色 = 第1因子

■ 橙色 = 第2因子

■ 紫色 = 第3因子

■ 黄色 = 第4因子

		第5期因子(n=519)			
		1	2	3	4
重要 と 思 う こ と	1 賃金や給料	-0.08	0.09	-0.04	0.56
	2 自分の能力・経験が発揮できること	0.20	0.64	-0.11	-0.07
	3 仕事の内容	0.04	0.88	-0.05	-0.18
	4 職場の環境整備	-0.05	0.57	0.05	0.19
	5 勤務時間や休日	-0.24	0.36	0.22	0.29
	6 仕事仲間との人間関係	0.08	0.41	0.02	0.20
仕事 を す る 理 由	7 収入を得るため	0.19	-0.14	-0.15	0.68
	8 社会とのつながりを持つため	0.68	0.09	0.05	0.02
	9 社会の中で役割を果たすため	0.88	0.06	-0.04	-0.04
	10 自分自身が成長するため	0.63	-0.03	0.21	0.14
	11 生きがいや楽しみのため	0.29	-0.03	0.51	0.02
	12 生活のリズムを維持するため	0.07	-0.02	0.77	-0.07
	13 心身の健康のため	-0.03	-0.02	0.91	-0.09

因子間相関

	1	2	3	4
1	1	0.38	0.55	0.29
2		1	0.44	0.54
3			1	0.36
4				1

分析の結果 2

■ 第6期の結果

■ 分析データは妥当

KMO測度=0.859

バートレット球面性検定

$p < 0.01$

■ 分析データ数

n=461

(すべて回答のあった就労者)

■ 4因子構造を指定

第5期結果の分析で抽出された因子数を指定

■ 分析結果

右図のとおり。

■ 緑色 = 第1因子

■ 橙色 = 第2因子

■ 紫色 = 第3因子

■ 黄色 = 第4因子

		第6期因子(n=461)			
		1	2	3	4
重要 と 思 う こ と	1 賃金や給料	-0.11	0.09	0.07	0.70
	2 自分の能力・経験が発揮できること	0.31	0.55	-0.09	0.08
	3 仕事の内容	0.29	0.63	-0.11	0.06
	4 職場の環境整備	-0.07	0.78	0.06	-0.04
	5 勤務時間や休日	-0.12	0.68	0.00	0.00
	6 仕事仲間との人間関係	-0.09	0.60	0.16	-0.11
仕 事 を す る 理 由	7 収入を得るため	0.05	-0.11	-0.02	0.65
	8 社会とのつながりを持つため	0.50	-0.05	0.48	0.04
	9 社会の中で役割を果たすため	0.75	-0.10	0.34	-0.05
	10 自分自身が成長するため	0.43	0.02	0.52	-0.03
	11 生きがいや楽しみのため	0.12	0.11	0.66	0.00
	12 生活のリズムを維持するため	-0.01	0.01	0.83	0.00
	13 心身の健康のため	-0.07	0.01	0.88	0.05

因子間相関

	1	2	3	4
1	1	0.43	0.49	0.18
2		1	0.34	0.56
3			1	0.09
4				1

分析の結果 3

■ 因子の命名

各因子を構成する
項目を考慮して、
因子を命名した

(結果1、2と色を対応)

■ 因子1 仕事を通じた社会参加因子

社会との関係の中で仕事をする要素が含まれる

- 項目例 項目8「社会とのつながりをもつため」
項目9「社会の中で役割を果たすため」
項目10「自分自身が成長するため」

■ 因子2 職務の遂行因子

職務を遂行する上で重要となる要素が含まれる

- 項目例 項目2「自分の能力・経験が発揮できること」
項目3「仕事の内容」
項目4「職場の環境整備」

■ 因子3 心身健康因子

日々の健康の維持を意味する要素が含まれる

- 項目例 項目11「生きがいや楽しみのため」
項目12「生活リズムを維持するため」
項目13「心身の健康のため」

■ 因子4 収入の確保因子

賃金の獲得に関連する要素が含まれる

- 項目例 項目1「賃金や給料」
項目7「収入を得るため」

考察

■ 障害者雇用の質の要素となりえる4因子を抽出

- 「仕事を通じた社会参加因子」 = 就労による社会参加の重要性
- 「職務の遂行因子」 = 職務の遂行そのものに意義がある
- 「心身健康因子」 = 仕事を通じて心身健康を凶る
- 「収入の確保因子」 = 収入の確保は大切である

■ 先行研究※に言及のある因子

「仕事を通じた社会参加因子」「職務の遂行因子」「収入の確保因子」

※『障害者雇用の質的改善に向けた基礎的研究（2018）』

■ 本分析で明らかになった因子

「心身健康因子」

■ 研究の限界と留意点

- 本分析は障害種類、年齢、性別等を合わせて実施した結果であり、個別の障害種類、年代、性別間の比較に用いることが出来る
- 一方、これらの階層効果には留意が必要である
- 時勢により因子構造に違いが出る可能性もある